Theater Association of KANAGAWA TAK

DRAMA かながわ

NO.93

Theater Association of Kanagawa December 2024

TAK in KAAT「マリア・ルーズ号の夏」

芝居塾2024「OZ Episode:0」／2024年度合同公演 情報
令和6年度 神奈川県演劇フェスティバル／資料室だより ほか

TAK in KAAT
『マリア・ルーズ号の夏』
2024年8月10日(土)～11日(日)　KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ

【総評】吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）

■40年の節目に

劇団横濱にゅうくりあの旗揚げは、1984年、神奈川県立青少年センターへと向かう紅葉坂の登り口を左に入ってすぐのカトリック教会の地下にある小さな空間であった。以来、この教会を含めて山手ゲーテ座（岩崎ミュージアムB1F）、相鉄本多劇場、山下公園のあかいくつ劇場、STスポット、青少年センタースタジオHIKARIなど、小劇場空間での公演を積み上げてきた。

この間、一貫して掲げた作品作りのコンセプトは「横浜をテーマ、イメージ、舞台とするオリジナルシアター」。舞台設計はシンプルに。照明、音楽、舞台監督などはなるべく自前か近しくお付き合いさせていただいている同志ともいえる皆さんの力を借りて、手創り感を大切にする作品を送り出してきた。

とはいえ、にゅうくりあには初期の頃からアマチュアリズム、あるいはアマチュア演劇という定義づけをよしとしない感覚があった。少なくとも公演で料金をいただくからには、そこに全面的な責任が発生するという考え方。その結果、この40年を振り返るときアマチュア演劇という言葉や定義づけを念頭に芝居創りを行ったことはない。「納得のいく芝居を創る」という共通の目標で集う仲間たちの間にも、アマチュアリズムに浸る仲良しという感覚はなかったのではないだろうか。それは稽古をはじめ舞台に向けて芝居を創っていく過程で、遠慮なく意見をぶつけ合う光景がよく見られたことからも伺える。

■KAAT公演を振り返って

にゅうくりあの伝統でもある、いつも誰でも真剣勝負という空気感は、とりわけ今回の40周年記念の舞台づくりでも発揮されていたのではと感じる。その要因となったのが、いつにない客演陣の充実ぶりだったと思う。準劇団員ともいうべきお三方との呼吸はぴったりで、皆さん稽古の過程で積極的に芝居創りのための意見を提示してくれた。今回初めて舞台創りを共にした他の客演陣も、負けないくらいいろいろな意見やアドバイスを提案してくれたし、音響オペレーションなど技術面のサポートでも、大いに助けられた。外部からの助っ人という感覚がなくて、立場の違いを超えて、みんなで一緒にいい舞台を創ろうという気概が見えたのがとても嬉しいことであった。

今回のTAK in KAAT企画では、公演の舞台日程が始まるほぼ1週間前から本番と同じ舞台の広さを持つアトリエに、舞台の基本設計をそのまま組み上げて稽古できるというこの上ない贅沢な稽古環境を実現できた。それが、本番に向けてピシッとしまりのある稽古の積み上げに結びつけられたのだと思う。加えて、舞台監督に演劇プロデュース『螺旋階段』の緑慎一郎氏、照明設計の江見千尋氏、さらには稽古場設営から本番舞台での装置組み上げまでを完璧にサポートしていただいた劇場のチームなど、錚々たるプロ集団のお力をお借りできたことが、なんとも贅沢な舞台創りに結実した。あとは役者達が各自の役割をしっかり果たすだけ、というこれ以上ないくらいに恵まれた芝居環境で開幕を迎えることができたのだ。

制作面では、根幹となるチケ売りについて、劇団本部のスポンサー獲得へのプッシュ、さらには劇団員各位の頑張りもさりながら、客演陣の果たした役割が大きい。当初はチケ売りのペースがなかなか上がらずだったが、残り2週間前くらいからの追い込みは見事だった。結果的には200席×3公演で計600席という目標設定に対して実動員555席。公演一週間前くらいの段階でほぼソールドアウトとなったのは素晴らしいの一言。逆に開演直前になって駆け込みのお客様何名かに対してお断りせざるを得ない状況があって本当に申し訳ないことだった。

■課題

KAATでの素晴らしい舞台体験となったことは喜ばしいのだが、反面では課題に気づかされる公演でもあった。大きな天井高ゆえに、日ごろ慣れ親しんでいる小さな箱に比べると空間が3倍くらいに感じられたのだ。客席の収容人員での比較以上に舞台空間が広いのだ。芝居や役者の存在感、演技の質という前に声がキチンと客席まで届いているか？という課題に直面することになった。実際、役者の何人かについてはこの点で「？？」となる場面もあった。この基本課題の解決としては、とにかく最後列まで声を届かせる、そのためには意識をいかに遠く広く保ち続けられるかということ。芝居の基本ともいうべきそんなことをリアルに体感できたことは貴重である。必ずや今後に生きてくると思う。声のボリュームだけでなく、演技全般についても広い空間に合わせた演技イメージを身に着けること。団員一人ひとりにとって、必ずや今後の演技の向上につながるはずである。

劇評 TAK in KAAT 『マリア・ルーズ号の夏』

■歴史的背景

1872年（明治5年）7月、横浜港に入港したペルー船マリア・ルーズ（Maria Luz ：マリア・ルース、マリア・ルスとも表記）号から一人の中国人が脱走して日本側に保護されました。その中国人は「虐待されている」と訴えました。マリア・ルーズ号はポルトガル領のマカオから中国人を苦力（クーリー）として雇い、ペルーに向かう途中、修理のため横浜に入港したものであり、中国人は実質的には奴隷として扱われ、虐待されていることが判明しました。苦力とは、新大陸に渡る移民としてペルー側と金銭的契約を結んだが、事実上は人身売買であり、彼らは奴隷の待遇を受けていたのです。

日本政府はマリア・ルーズ号の出港を禁止し、船長を訴追。さらに当時の神奈川県権令（県副知事）の大江卓は中国人に対する虐待を有罪としました。マリア・ルーズ号船長と移民業者は中国人に契約履行を求め提訴しましたが、大江は奴隷輸出契約は公序良俗に反するとしてこの請求を却下。これを受けペルーは日本の措置を国際法に違反するとして、真っ向から対立しました。両国は交渉の結果、1873年にロシア皇帝アレクサンドルⅡ世を裁判官とする仲裁裁判に付託することで合意し、1875年にアレクサンドルⅡ世は日本側の主張を認める裁定を下し決着しました。なおこの時ペルーが日本でも娼妓制度があり人身売買が行われていると反撃したのを受け、明治政府は1872年10月太政官布告を出し、娼妓を解放しています。

マリア・ルーズ号事件が起こってからすでに150年。当時の日本にとっては国際社会から攻撃される可能性のある事件だったにも関わらず、騙され自由を拘束されて苦しんでいる人々を解放したという事実は、日本として名誉ある行為であったと言えます。また日本国内においてもこの事件をきっかけとして、遊女を人身売買だと認め禁止に踏み切らざるを得なくなったことは、歴史的に見ても日本の人権意識の先駆けとなったと言っても過言ではないでしょう。「日本人は人権感覚が鈍い」と国際社会からは批判されがちですが、その日本で近代文明のまだ入口の時代に、この様な偉大な行為がなされたことはとても誇らしいと感じます。

■観劇記

私のことですが、定年退職するまで横浜市中区尾上町の桜木町駅そばの大江橋の袂にあった会社に勤めておりました。その橋が主人公の大江卓さんに由来した橋であることを今回初めて知った次第です。

私の従事した仕事の職場は、横浜税関を中心とした赤レンガ倉庫やセンターピアーと呼ばれていた倉庫群であったため、当時をなつかしく思い出しました。そのころはコンテナー船は本牧ふ頭に着岸するくらいで、まだまだ艀と呼ばれる荷役がセンターピアーでは主流でした。港での倉庫や艀でのきつい荷役に労働者と呼ばれる多くの人が汗を流して働いていた現場です。

保税倉庫としての役割は1989年までに終え、その後しばらくは放置状態となっていましたが、2002年に「横浜赤レンガ倉庫」として、1号館は展示スペース・ホールなどの文化施設、2号館は商業施設に生まれ変わり、赤レンガ倉庫の付近一帯は広場と公園を備える「赤レンガパーク」として整備されました。以降、みなとみらい地区の代表的な観光施設となっています。

さて、マリア・ルーズ号での話は初めてで、本当に当時の清国の人達が船に閉じ込められてペルーへ奴隷として人身売買されようとしていた事態を、人道主義・自由・平等の考えのもと日本国が裁判をし勝利したという事実に接し感動しました。

セリフ芝居であり多くの登場人物が主張と状況を繰り返し説明し感情を吐露していく内容は、簡略化した舞台設定とマッチしていて良かったです。平等や人権にふれる作品は永遠のテーマがあり、解決のできにくい事であるのに、にゅうくりあの皆さんの力強く取り組む姿勢はいつも観客をとりこにしてしまいます。とてもすばらしい公演でした。

芝居の最後に挿入されたフォー・セインツの「希望」の歌に、これからの「劇団横濱にゅうくりあ」の行く末を託したように感じました。創立40周年おめでとうございます。神奈川の演劇の仲間と共にお祝いを言わせてください。

文：劇団蒼い群（村田次郎）

芝居塾2024

成果発表公演『OZ Episode:0』
2024年8月10日(土)～11日(日) 山手ゲーテ座ホール

【総評】横山ギンガ（G/9-Project）

今年度の芝居塾は4名の参加があった。高校生のときに演劇をやっていた方、脚本の書き方を学びたい美術関係の方、照明や音響技術に興味を持った芸術家など、興味も経験も様々だ。芝居は年齢も性別、趣味も職業も関係なく人を魅了する。

本企画は全6回の講座ののち、20分間程度のミニ公演を行うカリキュラムとなっている。最初に基礎を学び、実践として成果発表を行うという、現代の教育に則った形だ。

第1回の講座では役者の楽しさを学ぶためシアターゲームを開催した。人と人が繋がるのが芝居の楽しみについての一つだ。受講生の方々は緊張していた。もちろん初対面の人たちに囲まれてリラックスなどできるわけがない。だが、徐々に緊張は解けていく、ゲームを通じて心が通いあうのがわかる。講座が終了する頃には参加者が笑顔で打ち解けられるようになっていた。

第2回は舞台美術の講座。塾生一人一人が小道具や衣装を作成した。ここは表現の場としてそれぞれデザインしたものが形になる過程を体験していただいた。お互いに各々の好みを作品に表現しており、塾生みんなの表情はちょっとした達成感に満たされていた。

第3回の講座では音響・照明の基礎を学んだ後、実際に簡単なステージを組み上げる経験をしていただいた。はじめてステージに立つ経験をした塾生の方は、役者が板上で浴びる照明の眩しさや暖かさに感動していた。

第4回の講座はミニ公演の企画に向けた講座として制作・舞台監督について学んでいただき、第5，第6回講座でミニ公演の稽古に取り組んでいただいた。

ミニ公演はなるべく塾生が主体的に活動できるよう、枠の中で何をやりたいかヒアリングし、どう実現していくかをレクチャーしていった。当劇団では何をやりたいかという事、何を実現するかという事を区別して考え、何をやりたいかを自由に発想する所から企画を始めている。芝居塾でも同じ形をとり一から何をやりたいかを塾生には考えていただいた。一から芝居を作り上げるというのは大変な経験で何を挙げていいかわからない様子だった。

忙しい日常生活では何を実現できるかという事から発想を始めることが多い。塾生方も何をやりたいかと考える時にどうしても「実現できるのか？」という事を考えてしまうようだった。頭を突き合わせて話し合った結果、『OZ Episode:0』という当劇団のオリジナル作品を行う事となり、塾生からはキャストが2名，音響1名，照明1名の役割に立っていただいた。

いよいよミニ公演の日を迎え、会場の山手ゲーテ座ホールに塾生4名が集まる。劇場に入るのは4名全員にとって新鮮な経験だったようで、劇空間として設えられた独特の空気に目を輝かせていたように見えた。簡単な仕込みを終えていよいよゲネプロが始まる。いざ本番という空気感に緊張して臨む4名、やり遂げようという思いがにじみ普段はやらないようなミスをしてしまう。だけど、一人の塾生の演技が空気を変えた。アドリブを入れたのである。平安時代を舞台とした作品だが「スマホ」という話題を出すと、意表をつかれた相手の役者，スタッフまでも思わず笑ってしまった。全員の緊張がほぐれたのがわかる。芝居は自由なんだとその瞬間に実感していただけたようだ。そこからは本番に向けてそれぞれリラックスして取り組めた。ミニ公演は猛暑にも関わらず結構な数のお客様に集まっていただけた。ゲネプロで作られた空気は本番にも続き、塾生4名は余計な緊張なく舞台に集中していたようだった。集まったお客様からもたくさんの拍手をいただいた。振り返ると芝居塾というチームで作り上げた空気感がこの結果に繋がったと感じる。

今回の芝居塾は，当劇団としても座組とはどういうものかを考えさせられる良い機会となった。一人のエネルギーが他の人を通してアンプのように増幅され、より大きくなったエネルギーがお客様を元気にしていく。きっと元気になったお客様は生活に戻った後に社会へ大きなエネルギーを放つだろう…芝居の力は無限大だ。

来年度も開催されるであろう芝居塾。興味があったら皆様もぜひご参加を。きっと多くの新しい経験ができることでしょう。

2024年度 神奈川県演劇連盟合同公演 情報

横浜・馬車道を辿りながら作品世界に想い馳せる

2025年3月21日～23日に神奈川県立青少年センター紅葉坂ホールで開催予定の今年度の「神奈川県演劇連盟合同公演」が始動した。作品タイトルは『Yokohama Mice（ヨコハマ マイス）』。横浜を舞台に、たくましく生きるネズミたちの絆を描いたスペクタクル群像劇だという。この合同公演は2024年に一般社団法人化した神奈川県演劇連盟（TAK）が青少年センターと共催する恒例行事で、普段は別々に活動する演劇人たちが一堂に会し、共に作品を創り上げる場として知られる。

■作品概要と公演の特徴

物語は20世紀初頭の横浜・馬車道の路地裏が舞台だ。ネズミたちの絆を軸に、歌と踊りを交えた壮大な物語を描く。脚本を手掛けるのは中西広和氏（ドリル饅頭）。彼の作風は、大らかさや優しさ、善性を浮き彫りにするのが特徴だ。演出は昨年度の合同公演に続き、中山朋文氏（theater 045 syndicate）が担当。中西氏と中山氏の初タッグにより、観客を明るく元気づけるステージが期待だ。20名以上が出演予定ということからも作品のスケールの大きさが窺える。出演者には神奈川県内外で活躍する俳優たちが名を連ね、舞台監督は緑慎一郎氏（演劇プロデュース『螺旋階段』）、照明は阿部康子氏、音響は斎藤裕喜氏（Québec）といった、中山氏曰く「プロ中のプロ」のスタッフが舞台裏を支える。

■事前ワークショップ：役者同士の絆を深める場

合同公演 公式Xアカウントから引用

合同公演の特徴の一つは、事前に行われるワークショップだ。抜粋脚本を使った稽古が行われ、本の捉え方や演技力を磨きながらお互いの人間性や演劇観を深く理解する機会となっている。中山氏は「家族としてのネズミたち全員が主役」と強調し、キャラクターの個性を立体的に描き出すための演出に注力すると語る。

■作家・中西広和氏インタビュー

作：中西広和（ドリル饅頭）

中西氏は「人間ではなくネズミを主役にしたのは、家族の絆をもっと掘り下げて描きたかったから」と語った。ネズミが家族愛の強い動物であることに着目しキャラクター間の均衡を保ちながら物語を作り上げる工夫を施す。「大きなメッセージを押し付けるのではなく、観客が何かを感じ取ってくれたら嬉しい」と、観客の心にそっと寄り添う作品を目指す。また稽古について「役者の成長とともに作品がどのように仕上がるのか楽しみ」と期待を寄せ、中山氏については「稽古場でのアイデアが的確」と絶大な信頼を示した。

■演出家・中山朋文氏インタビュー

演出：中山朋文（theater 045 syndicate）

中山氏は「最初に脚本を読んだ時、なぜネズミなのかと驚いたが、生存本能が色濃く表れた作品だと感じた」とコメント。演出面では、俳優たちが持つ本能的なエネルギーを舞台上で最大限に引き出すことを重視している。また、中西氏の脚本が描く「温かく前向きなテーマ」は、観客に新たな視点をもたらすと語り、キャラクター造形を緻密に追求していく意欲を示した。

■作家と演出家の対談

【中山】中西さんが神奈川県演劇連盟に加盟したのは去年の7月でしたよね。久しぶりに新しい方が加わった感じで、また、中西さんのキャリアの厚みを感じました。

【中西】連盟の皆さんとのつながりができたのはとてもありがたいです。特に中山さんの一人芝居を観た時「怪物がいる」と思いました。あれは衝撃的でした。一人芝居って本当に難しい。自分を客観視しながら自己演出ができる人でないと無理だと思うんです。中山さんはその点、プロデュースのスキルが素晴らしい。だからこそ今回、一緒にやらせていただくことに安心感がありました。

【中山】そう言っていただけると嬉しいです。今回の合同公演を始めるにあたって、中西さんの熱意を感じました。候補者の中で一番最初に本が完成していたんですよね。それだけで「この人に任せたい」と思わせるものがありました。

【中西】今回は是が非でもやりたかったんです。

【中山】演劇の良さって、観る前と観た後で何か小さな変化が生まれることだと思うんです。例えば映画「ロッキー」を観た後、次の日に走りたくなるような、そんな影響が少しでも残れば嬉しいですね。

【中西】そうですね。お客さんが観終わった後、家に帰って家族に優しくしてみようとか、日常にちょっとした変化が生まれるといいですね。観終わった後、ささやかな心の揺れ動きが生まれるような作品になれば。

【中山】演劇を通じて、800人が観てくれたら800通りの変化が広がる。その変化が日常で誰かに伝わり、少しずつ社会が良くなるといいなと思っています。面白くて熱い舞台になると思います。ぜひ観に来て欲しい！全力を尽くして頑張ります！

対談は馬車道から徒歩数分の所にある、みなとみらいが一望できる公園にて

■結び：観客の心を惹きつける舞台へ

『Yokohama Mice』は、家族や仲間、絆といった普遍的なテーマを基に、横浜の歴史的な風景を舞台にした壮大な物語が構想されている。前年度の公演が混沌を乗り越える力強さを描いたのに対し、今回は優しさとつながりをより深く掘り下げた内容になるという。20世紀初頭の横浜を舞台にネズミたちの姿を通して「生きる力」を観客に届ける舞台。ぜひ、このスペクタクル群像劇を体感しに劇場に足を運んでみてはいかがだろうか。

文：こんのかつゆき（劇団コピュラ）

令和6年度　神奈川県演劇フェスティバル　劇評

G/9-Project「12人の職員会議」
2024年8月9日(金)～11日(日) 山手ゲーテ座ホール

12人の教員がそれぞれ雑談しながら出てきて、2か月後の卒業式に向けた校歌練習で舞台が始まる。暗転や上演の合図はなく突如現れたキャスト陣に観劇モードとなる客席は、さながら担任が現れ授業モードになる教室のようだった。その後は教員たちが雑談をしながら机や椅子を出し、会議の準備を進めていく。舞台の設営と話の進行は同時だ。あくまで日々を描くことに注力した作品なのだと感じた。

素行不良な生徒黒川が卒業間近で問題を起こす。本人は無実を主張しているが、退学処分とするか否かが今回の職員会議の議題である。職員全員一致が条件の採決では、スクールカウンセラーであるひとりの男性を除いて、残り全員が退学処分に賛成と挙手をする。カウンセラーの「このままろくな話し合いもせずに、ひとりの生徒の今後を決めてしまってもいいのでしょうか」という言葉をきっかけに、12人の教員の話し合いが始まる。

話し合いが進むにつれ、教員たちの人物像が見えてくる。規則やほかの生徒への影響を懸念する者、事の重大さを踏まえ話し合いを行いたい者、黒川の素行不良ぶりやその後対応に追われたこれまでを踏まえて感情的になりつつある者、事実を冷静に把握しようとする者、これまでの教員生活で得た意見や自身の違和感を少しずつ口にする者たちなど様々だ。話し合いは白熱しつつも、教員たちの人物性に悪意がなく、とても見やすい。

話し合いが深まると、問題を起こしたのは黒川ではないという流れから、真犯人として新たに名前の挙がった生徒についても考えることとなった。「自分の判断がひとりの生徒の人生を左右するかもしれない。そして、その判断は自分の人生にも大きく関わってくるかもしれない」という事柄に直面するのである。

この感覚は教員に限ったことでも仕事に限ったことでもない。生きていれば誰しもこの事柄に直面することがある。一方でこの気づきに縛られてしまうのでは報われない。だからこそ話し合うことに意味があるのだ。話し合って少しでも納得をしたり、気持ちを共有することは前を向く原動力になる。実際、今回の職員会議で出した結論が、議題に挙がった生徒たちの今後に関わるとは限らない。自分の意志で自分の人生を歩むことの大切さにハッとさせられるエピソードもあり、様々な面から作品を理解することができた。そうして職員会議は全員一致でひとつの結論に至る。

議題が議題なだけに、これで万事解決というものではない。ただ「話し合うことに意味がある」という落としどころとして救いがあったのではないだろうか。生徒にも教員にも、この話し合いが意味を為していたらうれしい。そう思わせる作品や人物作りがあり、訴求力があった。

どんどん前のめりになって観劇できました。白熱した展開ながらもどの人物にも共感でき、この話し合いに参加できてよかったと感じています。とても面白かったです。

文：おもち（劇団「無題」）

まりこ☆みゅーじあむ「おはなしころころ」
2024年9月7日(土)～8日(日) のげシャーレ

開演前に会場に入ると舞台前に靴を脱いで座れるスペースがあり、親子で座ったり寝転んだりして子供たちがリラックスした雰囲気で開演を待っていました。

最初のお話は「まんまる魔女の3枚のおふだ」。お寺の小僧が山に栗拾いに行き、まんまる魔女に追いかけられるお話。影絵を使って魔女が変身したり、大きくなったり小さくなったり、子供たちも引き込まれるように聴き入っていました。

二つ目のお話の「はなさかじい」では布紙芝居を使って正直じいさんのときは大判小判が、いじわるじいさんのときはがれきやがらくたが布紙芝居のポケットからざっくざく、正直じいさんが枯れ木に灰をまくとビニール傘に付けた花がぱっと満開に、子供たちも大喜びで花にさわったり、中には花を取ってもらっちゃう子も（笑）。

ここでしばらく休憩。子供たちはお宝づくりの工作タイム。用意された折り紙などを使って思い思いにお宝を作ります。大人の人には新聞紙が配られ、丸めてボールを作ります。これが何に使われるのかは後のお楽しみ？

最後のお話は「ももたろう」。おばあさんが川に洗濯に行くとどんぶらこと流れてくる大きな桃、これがいくつも流れてきて出演者に順番に分けてあげるというのも面白い。桃から生まれたももたろうは食べては寝、食べては寝の毎日、岡山県で伝わる横着者の桃太郎がモチーフでしょうか。また、しぶしぶ鬼退治に出かけたももたろうが、いぬ・さる・きじにきび団子を半分だけあげるのは備中地方の桃太郎にあるらしいです。それはさておき、きび団子一つ食べると百人力、いぬ・さる・きじは半分ずつなので五十人力、桃太郎は百五十人力、キャラクターのレベルのように表しているのはテレビゲームのようで、今の子供たちには入り込みやすい設定でした。いよいよ鬼ヶ島での鬼たちとの対決です。百人力の鬼たちには五十人力のいぬ・さる・きじは歯が立ちません。百五十人力のももたろうが孤軍奮闘するも決着はつかない。ここで子供たちの登場です。ももたろう軍と鬼軍に別れ、まずは綱引き対決。ここでも一勝一敗の引き分けに。そして最後は玉入れ対決。休憩時間に大人が作った新聞紙のボール、いや玉が使われます。子どもたちは物語に参加して楽しそうでした。結果はももたろう軍が僅差の勝利。鬼たちは奪ったお米や宝物を返して仲直りのハッピーエンドのおはなしでした。

おはなしごとに影絵や布紙芝居などの小道具を駆使し、最後は観客の子供たちも参加してのとても楽しい朗読劇でした。

このような団体が神奈川県演劇連盟に加盟されていることは大変貴重なことだと思います。「まりこ☆みゅーじあむ」は今回創立20周年の記念公演ということでしたが、これからも大人も子供も一緒になって楽しめる公演を続けてほしいと感じました。

文：露木幹也（演劇プロデュース『螺旋階段』）

劇団蒼い群「山茶花さいた」
2024年11月9日(土)～10日(日) 横須賀市立青少年会館3Fホール

蒼い群さんを観劇させて頂くのは今回が初でございまして、歴史ある劇団さんの公演という事で、とてもワクワクしながら会場へ向かいました。会場へ入るとどこか懐かしさも感じる素敵な家のリビングが舞台装置として組まれており、こんなに素敵なセットを組み上げて、たったの二日間しか公演しないというのは、めちゃくちゃ勿体無いなー、と思いつつも、それが蒼い群さんのこだわりなのかも知れない、などと勝手な妄想を膨らませておりました。

さて。物語が始まり、ここからはあくまでも主観でございますが、個人的には、物語全体の大きなテーマ『家族の想いや形』が随所に散りばめられ、家族であっても、一人の人間としてのプライパシーや権利の存在、それらについて笑いを混ぜながら、家族がストーリーを積み上げ、その時々の出来事を楽しんでもらう、といった作品なのではないかという印象でした。はい。家族。僕の大好きなジャンルです！ただ、もう、これは、私の拙い主観から見た、本当に凄くざっくりとした印象なので、失礼な書き方になってしまっているかも知れません。公演自体は、もっともっと細かい伏線や見事な回収があったりして、真面目で、ふざけて、最後にポロッとくるような、心打たれる作品でした。ああ、書けば書くほど、稚拙だ・・・蒼い群さんに怒られそう・・・。御免なさい！！とにかく、家族の素晴らしい物語を丁寧に紡いだ流れを観せて下さった、演出を始めとするスタッフ陣、役者陣には心から感服と感謝です！本当、役者さん全員、漏れなく「品」があり、ひねくれたセリフや、やり取りがあっても、それを見聞きしている私には不思議と不愉快な気持ちにはなりませんでした。これは役者が持つ「品格」が芝居をワンランクに昇華させているのだと感じました。

加賀美家の人々（加賀美忠助役のマサ高橋さん、忠男役の佐藤まもるさん、朋子役の泉ともこさん、陽子役の永野知里さん、忠之役の鳥羽蒼紫さん）が本当に素晴らしく、中盤から登場する長谷川兵吾役（屁ばかりするヘイゴという設定だったので、どこかで一発かましてくださるのかと思って、ずっと期待してしまいました）の村田次郎さん、安田悟役（朋子のお見合い相手で動物園の獣医さん）のファントムさん、このお二人も本当に素晴らしいとしか言いようがなく、村田さんには良く笑わせられたし、ファントムさんのセリフは私に刺さるセリフが多く、特に刺さったのは「人間だけですよ、親の面倒をみる動物は」ふむふむ～…さすが色んな動物を観察している獣医さん。確かになー！と、撃ち抜かれました。

最後になりますが、忠之役の鳥羽蒼紫さんは、今後、もっと色んな役が観てみたい、とても素敵な役者さんなので、皆さんも是非チェックしてみてください！！

文：中西広和（ドリル饅頭）

劇団河童座「これでいいのか！」
2024年12月14日(土)～15日(日) 横須賀市立青少年会館3Fホール

とある街が停電に遭い、解除されるまで孫と祖父がお互いあった出来事を話し、舞台上で実際に二人のよもやま話が展開されるという仕組みのオムニバス形式の3本立て。二人のやり取りは、舞台下の全面の下手（客席から見て左側）で炬燵を挟んで行われる。停電のため、炬燵にはろうそくが置かれている。

孫（女子高生）と祖父とのやり取りは『今』と『昔』を感じさせつつ心温まる役者さんのやり取りでしたが、いまいちリアリティがなく惜しい感じがしました。今どきの女子高生ならスマートフォンを持っている。持っていなければそれなりに理由がいるように思いました。ろうそくより、スマートフォンの懐中電灯機能があるはずですし、スマートフォンを持たせてもらえない設定も特にないので、違和感を感じました。また孫と祖父のやりとりも『今』と『昔』の対比の象徴としているはずなのに、二人とも話が弾んでとても仲が良くて、停電で普段は相容れないからお話をするという設定が生きてないように感じました。

第1話『福祉って…』。クラス内にいる車椅子の生徒に対する周囲の立ち振る舞いや気遣いの度合いはその人にとって心地いいのかどうかというのがテーマ。過保護気味な担任と体育会系の教師の対比で車椅子の生徒はどう感じるかというお話。担任の先生は生徒にとって過保護な優しさは居心地悪く、体育会系教師の厳しい接し方は全員にとって平等で居心地良いという、何が正解かわからないという考えさせられるお話でした。車椅子の生徒の方の演技が力強く、繊細でとても良かったです。

第2話『戦争って…』。痴呆症の祖父を持つ家庭のお話。1話とは対照的に痴呆症の祖父と家族と近所の婦人の接し方が自然で、痴呆症の方を持つご家庭は大変だけどこんな感じで軽く考えてみればどうでしょうか？という作家の気持ちが見え、ほのぼのとしました。

第3話『人間って…』。とある男女が登山をしており、そこでカワウソとカッパのカップルに出会う。お互いに種族を超えた結婚を望んでいて、それに反対しているカワウソ家族とカッパ家族が出て来て揉めるお話。カワウソだからこう、カッパだからこうというのが全くなく、格好だけで思考回路や生活感が人間そのものであった。これは人間に置き換えても出来るお話で、ネタ的でコメディリリーフの役割しか機能してない様に感じました。

全3話と合間の孫と祖父の話しに共通しているのは、ほのぼのしてて正解は人それぞれ感じ方や捉え方という作風でした。セリフで感情や状況の説明が多く、所々キャラクターとしてではなく作家の言いたいことを言うスピーカーのように感じてしまいました。欲を言えばもう少し作家独自の鋭い目線が欲しかったです。だが、劇場に流れる緩やかで温かい空気感こそが河童座の持ち味だと感じ『これでいいのだ！』と妙に納得しました。

文：坪井俊樹（クェル・ペッパー）

令和6年度 神奈川県演劇フェスティバル 参加団体
G/9-Project、まりこ☆みゅーじあむ、劇団蒼い群、劇団河童座、演劇プロデュース『螺旋階段』、Theater Company 夜明け

資料室だより

演劇資料室からオススメの一冊
「小田島雄志の芝居がいっぱい～セリフのある人生雑記～」
（小田島雄志 著／講談社）

著者である小田島雄志氏は、知る人ぞ知る英文学者であり、シェイクスピアの戯曲全37作品の完訳でも知られる。日本の演劇界にとって偉大な存在である小田島氏は、我々舞台を志す者にとっても宝物のような多くの評論を残している。まさに大御所なのだが、存外彼の素顔は酒と麻雀をこよなく愛して駄洒落を頻発するオッサンなのである。実績と評価に比してその素顔がこんなにもギャップのある大御所というのも珍しいのではあるまいか。

小田島氏のもう一つの顔は、とんでもない芝居ファンだということ。仕事なんだから当然というわけではなく、純粋に芝居が大好きなのだ。シェイクスピアを筆頭に海外の名作や話題はもちろん、国内でも翻訳劇から新派、歌舞伎、ミュージカル、SKD（松竹歌劇団）、宝塚、長谷川伸に至るまでおよそ演劇という表現ジャンルが包括するあらゆる舞台を観まくっている。ちなみに彼は全盛時には毎月24～5本の舞台を観ていたという。1年で300本。すごいエネルギーである。

そんな小田島氏が何を発したくてこの本を書いたかは、帯に記された言葉から知れる。曰く「芝居のセリフの素晴らしさを伝えたい」。舞台上で役者が発するセリフによって、我々役者だけでなく観客はその芝居の素晴らしさを知り、味わいを堪能する。その言葉の神髄に込められたスピリッツを想い、一言も逃すことなく聴くことに集中する。

舞台から得る感動の素は役者の所作であったり、時に装置のダイナミズムや照明の感性であったりもするが、やはりセリフという言葉の力ではなかろうか。

本書の冒頭で紹介されている、新橋演舞場で上演された三田佳子主演の「夢千代日記」の一場面。死を間近に意識する主人公が恋人に「今、何が欲しい？」と聞かれ、両手で包むような形を作り「愛が欲しい」と答え、さらに「これ位の小さな愛が」と言い添える。小田島氏はその言葉に胸を熱くしながら、ふと「自分は死を前にした時、何が欲しいだろう？」と自問したのだ。

いい芝居、いいセリフは、ふと我に返って己が人生に想いを至らせ、気づきを与えてくれたりする。

小田島氏の筆致には、決してセリフはかくあるべし、というような押しつけがましさはない。実に多彩なジャンルの芝居からある場面、あるセリフを抜き出し、それを食材のようにして自由闊達に名人シェフのごとく言葉という料理の腕をふるって見せる。実に明解な、かつ楽しい言葉遊びを展開してみせるのだ。

そのどれもが強い説得力を持つ。振り返って我々が舞台に立つとき、与えられたセリフをどれだけ読み込んで消化し、己の血肉として吐き出しているだろうか？そんな自分自身への問題提起を気づかせてくれる1冊だ。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）

シェイクスピア研究家小田島雄志の交友録。芝居の中からシャレた心にしみるセリフを軸に、人間との素敵な出会い、そして男、女優を中心とした遊び仲間との知的でユーモアあふれるとっておきのエピソードを語る。

【発売日】1987年6月30日
【判型】四六
【頁数】236ページ

演劇資料室

【開室時間】
平日（火曜～金曜）　13:00～22:00（貸出は21:30まで）
土曜・日曜・祝日（月曜以外）10:00～22:00（貸出は21:30まで）
【休室日】
月曜、年末年始
※上記以外にも休室日がございます。
ホームページをご確認の上、お越しください。
〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ケ丘9-1
神奈川県立青少年センター2階　演劇資料室　電話：045-286-4485

神奈川県演劇連盟加盟団体（50音順）

■演劇プロデュース『螺旋階段』　■クェル・ペッパー　■京浜協同劇団　■劇団蒼い群　■劇団河童座　■劇団コピュラ
■劇団年輪　■劇団820製作所　■劇団「無題」　■劇団横濱にゅうくりあ　■Theater Company 夜明け　■theater 045 syndicate
■ドリル饅頭　■プラスティックな月　■まりこ☆みゅーじあむ　■MPinK(ミュージカルプロジェクト in 神奈川)
■横浜小劇場（横浜演劇研究所附属）　■ヨルノハテの劇場

DRAMAかながわ 93号
[発行] 一般社団法人 神奈川県演劇連盟（2024年12月31日）
[編集] オッスたかのり（劇団かに座）、吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）、穂村一彦（劇団「無題」）、
緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）、野比隆彦、中山朋文（theater 045 syndicate）
[ホームページ] https://kenenren.or.jp/

ホームページ